



生成AI時代における組織的授業づくり

教科をチームに。“チームいくひ”で実践

神奈川県立生田東高等学校 秋山紀将

<抄 録>

本稿では、生成AI時代における授業づくりの在り方について、神奈川県立生田東高等学校における組織的实践を基に提言する。本校では、「教科をチームに」を合言葉に、全教員がICTおよび生成AIを日常的に利活用しながら授業改善に取り組んでいる。特に、「探究」「協働」「自己調整」の三つの視点を軸に、問いを起点とした授業づくりを推進している。本稿では、授業実践、生徒の変容、アンケート結果および課題を踏まえ、ICTや生成AIの組織的活用が学びの質の向上とメディアリテラシーの育成にどのように寄与するかを論じる。

<キーワード>

生成AI, ICT活用, 授業改善, 組織的实践, メディアリテラシー

1 はじめに

生成AIをはじめとするICTの進展は、教育における学びの在り方を大きく変えつつある。しかし、ICT活用は個々の教員の裁量に委ねられる場合が多く、組織的实践としての定着は十分とは言えない。

また、情報モラルやメディアリテラシー教育も、「禁止事項の理解」ととどまり、情報を判断し活用する力の育成には必ずしも結びついていない。

本校ではこれらの課題に対し、「問いを起点とした学び」を実現する基盤としてICTや生成AIを位置付け、組織的に授業改善に取り組んできた。本稿ではその実践と成果を報告する。

2 組織的授業づくりの基盤

本校の特徴は、「教科をチームに」という共通認識のもと、全教員が授業づくりに関わる点にある。ICT活用は一部の教員による先進的な実践ではなく、「全員が日常的にICTを利活用している風景が当たり前」である状態を目指している。

公立高校においては、教員の人事異動により毎年度一定数の入れ替えが生じる。このような状況においても、組織的な授業づくりを維持・発展させるために、本校では年度当初の研修設計を特に重視している。

具体的には、4月1日に実施する第1回研修において、ICTの基本的な利活用方法の共有とともに、「教科をチームにする」という本校の文化の理解を目的とした研修を行う。ここでは、ツールの操作方法だけでなく、「なぜICTを活用するのか」「どのように授業を協働的に設計するのか」といった理念的な部分を含めて共有することで、新任者を含めた全教員が同じ方向性を持つことを目指している。

さらに、4月中旬に実施する第2回研修では、当該年度の研究テーマを基にしたモデル授業を実施する。2026年度においては、「問いの立て方と答えの共有方法—問いが答えを生み、答えが新たな問いを呼ぶ—」をテーマとし、2名の先生に授業を実践してもらった。他の教員が生徒役となり参加することで、授業の流れや生徒の思考の動きを体感的に理解する機会としている。

このような実践型の研修により、教員は単に知識として理解するのではなく、「生徒がどのように考え、どのように学びを深めていくのか」を具体的にイメージすることができる。また、研修後には協議の時間を設け、授業における問いの設定やICTの活用方法について多角的に検討することで、各教科での実践へと接続している。

加えて、年間を通じて集合研修、教科別研修、ミニ研修を継続的に実施し、授業実践の共有と改善を図っている。これらの研修で得られた知見はクラウド上に蓄積され、教員同士が相互に参照しながら授業改善を進める仕組みが構築されている。

このように、本校では研修を単発の取組としてではなく、「研修→実践→共有→改善」という循環の中に位置付けている。この循環が機能することで、教科間に見られたICT活用の差は年々縮小し、すべての教科で日常的にICTが活用される状況が実現している。授業評価アンケートにおいても、「ICT機器を有効に活用していた」とする評価は全学年で平均3.6以上(4段階評価)となっており、これらの研修の積み重ねが、組織全体の授業改善に寄与していることが確認できる。

これらの取組が有効に機能した要因として、①全教員

が同一の理念を共有していること、②研修と授業実践が往還する仕組みが構築されていること、③「とりあえずやってみよう」という心理的安全性の高い文化が醸成されていることの三点が挙げられる。特に、教員間で実践を共有し合う文化が定着していることにより、新たな取組が個人の挑戦にとどまらず、組織全体へと波及していく点が、本校の特徴である。

3 授業実践と生成AIの活用

本校の授業づくりは、「探究する姿」「協働する姿」「自ら学びを調整する姿」の三つの視点を軸としている。これらを実現するために、本校では次のような役割をICTおよび生成AIに担わせている。

第一に、思考の可視化と共有である。例えばロイロノートを活用した授業では、生徒が個人で考えた内容を即座に共有し、他者の意見と比較することができる。これにより、教室全体で多様な視点が交錯し、学びが深化する。

第二に、生成AIを「対話の相手」として活用する実践である。国語科の授業では、小説の解釈について生成AIと対話しながら考えを整理し、自身の読みを再構築する活動を行った。この過程において、従来は発言に消極的であった生徒が、自分の考えを言語化し、他者と共有する場面が増加した。

第三に、生成AIを「議論の相手」として活用する実践である。数学科における実践では、生成AIを相手に論理的に説明する活動を取り入れた。生徒はAIを説得するために思考を整理し、順序立てて説明する必要があり、結果として論理的表現力の向上が見られた。

さらに、本校では理科において生成AIをシミュレーターとして活用するなど、各教科の特性に応じた多様な実践が展開されている。

これらの実践により、生徒は単に知識を受け取るのではなく、自ら問いを立て、協働しながら学びを深める姿が見られるようになった。実際に授業アンケートでは、「自ら学びを調整する姿が見られたか」に対して9割以上が肯定的に回答しており、「探究」「協働」の場面についても同様に高い水準を示している。

一方で、生成AIやICTの活用には課題も存在する。特に、生成AIを活用した学習においては、AIの出力をそのまま受け入れてしまう生徒や、思考の過程を十分に経ずに結論に到達しようとする姿も一部で見られた。また、教員側においても、ICTの活用自体が目的化し、授業のねらいと乖離する可能性がある。

このような課題に対しては、「問いを起点とした授業設計」を軸に据え、生徒が思考するプロセスを重視することが重要である。本校では、生成AIをあくまで思考を深めるための補助として位置付けることで、主体的な学びを維持するよう工夫している。

4 情報モラル・メディアリテラシーとの関連

生成AIの普及により、情報の信頼性や著作権、表現の責任などに関する課題はより複雑化している。このような状況において、情報モラル教育は単なる規範の伝達ではなく、状況に応じて判断する力の育成へと転換する必要がある。

本校の授業実践では、生徒が他者の意見に触れ、自らの考えを再構築する過程を重視している。例えば、生成AIとの対話を通して得られた情報をそのまま受け入れるのではなく、教科書や資料と照らし合わせて検証する活動が見られるようになった。また、グループで作成した成果物を共有する際には、情報の正確性や表現の適切さについて互いに検討する姿が見られる。

このような学習経験の積み重ねは、情報を批判的に捉え、適切に活用する力の育成につながる。すなわち、ICTや生成AIを活用した日常的な授業そのものが、メディアリテラシー教育の基盤として機能しているといえる。

5 おわりに

本校の取組は、特別な設備や条件に依存するものではない。むしろ、研修の設計や実践の共有といった仕組みを整えることで、多くの学校においても再現可能であると考えられる。

生成AIやICTの活用は、個々の教員の工夫に委ねることだけでは、教育の質を大きく変えることはできない。本校の実践から、個々の工夫を組織的に活用することで、学びの在り方そのものを変革できることが示唆された。特に、「教科をチームに」という共通理念のもと、全教員が授業改善に関わる体制を構築することが、ICT活用の定着と学びの質の向上に大きく寄与している。

今後もICTや生成AIの活用を目的化するのではなく、生徒の思考・協働・自己調整を支える手段として位置付け、組織的な授業づくりを継続していくことが求められる。そして何より「とりあえずやってみよう」と挑戦を後押しする文化の中で教員自身が学び続ける存在となり、その姿が生徒の学びへと連鎖していくことこそがこれからの教育において最も重要である。